

19 世紀中期の東蝦夷地三石場所におけるアイヌ集落の 存続期間と血縁親族関係

遠 藤 匡 俊*

要 旨 定住性が高い狩猟採集社会である 1864～1869（元治元～明治 2）年の東蝦夷地三石場所のアイヌ集落を対象として、定住性の程度と集落の血縁率の関係を分析した。その結果、「集落の存続期間が長くなると血縁率は低くなる」という傾向はとくに認められなかった。また「家の同一集落内滞在期間が長くなると血縁率は低くなる」という傾向もとくに認められなかった。集団の空間的流動性の程度と集落の血縁率の関係を分析した結果、分裂・結合の流動性の程度と集落の血縁率の間にもとくに関係はなかった。これは集団の空間的流動性が、移動する家のみで形成されるのではなく、集落内に定住する家と移動する家の組み合わせで生じており、集団の空間的流動性には血縁共住機能があり集落の血縁率が維持されているためと考えられる。集落の血縁率の変動率（絶対値）は平均 24.9% と大きく、その変動は主に集団の空間的流動性に起因していた。多くの場合に集落の血縁率は 50% 以上に保たれており、血縁率は平均 73.6% である。この結果は、三石場所のアイヌ集落においては、移動性（あるいは定住性）の程度に関わりなく、集団の空間的流動性によって集落の血縁率は低下しない可能性、つまり国家という枠組みのなかに組み込まれながらも「血縁から地縁へ」という変化は生じない可能性があることを示唆する。

キーワード アイヌ、定住期間、血縁親族関係、集団の空間的流動性、三石場所

I. はじめに

これまで様々な人間関係や社会集団の構成など人の生活が成立するうえでの基本原理として、地縁と血縁があげられてきた（Maine, 1861; Morgan, 1877; Murdock, 1945; 清水, 1987; 渡邊, 1987; 小川, 1999, 2000）。集落を「人間が居住する家屋あるいは家屋群およびその周辺」と定義するとき、限られた地域的スケールに分布する家屋群が集落であり、集落は地縁と密接に関わっていることになる。集落の居住者が主に血縁関係にある場合には、集落は血縁集団であり地縁集団でもあることになる（清

水, 1987）。本研究では、集落の居住者間の血縁親族関係の程度を示す血縁率に着目する。集落の血縁率が高い場合には「主に血縁によって成立している集落」とし、集落の血縁率が低い場合には「主に地縁によって成立している集落」とする。また本研究では、集落という用語をその存続期間の長さに関わらずに用いることにする。

移動性の高い現存の狩猟採集社会におけるバンド（band）といわれる社会集団は、一般に親族関係によって形成されている（Service, 1966）。つまり狩猟採集社会にみられる集落は、地縁集団であり血縁集

* 岩手大学教育学部地理学研究室 〒020-8550 盛岡市上田 3-18-33

団でもあると考えられる。集団構成員の顔触れが頻繁に入れ替わる集団の空間的流動性は、アフリカのサン San (ブッシュマン Bushman)、ムブティ・ピグミー Mbuti Pygmy、ハッザ Hadza、北アメリカのイヌイト Inuit、ヘヤー・インディアン Hare Indian、中国のオロチョン Orochon などの移動性の高い狩猟採集社会で主に現地調査によって確認されてきた (Turnbull, 1961, 1965, 1968; 須江, 1964; Woodburn, 1968; Damas, 1968; Lee and DeVore, 1968; Savishinsky, 1971; 田中, 1971; Tanaka, 1978, 1980; Lee, 1979; 原, 1989; 張, 2006)。このように同じ場所には2~3週間ほどしか滞在しない移動性の高い狩猟採集民と比較した場合、19世紀中期以降のアイヌは定住性がかなり高い漁撈民であったといえる (Decamps, 1925; 羽原, 1937; 高倉, 1940; 泉, 1952; 渡辺, 1965; 足利, 1968; Murdock, 1968; アイヌ文化保存対策協議会, 1969; Watanabe, 1972; 小林, 1975; 煎本, 1987; 遠藤, 2009)。しかし、定住性のより高いアイヌの集落においても、1年以上の時間的スケールでみると、集団の分裂と結合がみられ、集団の空間的流動性が生じていた (遠藤, 1985, 1987a, 1987b, 1997, 2006)。

狩猟採集社会でみられる集団の空間的流動性は主に紛争処理理論 (conflict resolving theory) で説明されてきた (Turnbull, 1968; Lee and DeVore, 1968; Savishinsky, 1971; 田中, 1971; Woodburn, 1972; ロバーツ, 1982; 原, 1989)。集団の空間的流動性には、集団の中で生じた不和や社会的緊張を、集団が分裂することによって解消し、人間関係がより悪化することを未然に防ぐという紛争処理機能 (もしくは紛争解決機能) が備わっていると考えられてきた。しかし、アイヌの事例の分析によって集団の空間的流動性には、同じ家で暮らした親子、兄弟姉妹が結婚を契機に居住集落を異にした後になっても、それぞれが新たな家族とともに移動することによって再び同じ集落で暮らそうとする、いわば血縁共住機能が

備わっていることが示されている (遠藤, 2006)。これは従来の紛争処理理論に対して血縁共住理論 (close kins co-residing theory) ともいえる。

それでは狩猟採集社会においては、どの程度の移動性 (あるいは定住性)、どの程度の集団の空間的流動性が、どの程度の集団の血縁率と、どのような関わりをもっていたのだろうか。集落内の居住者間の血縁親族関係はどの程度に変動し、あるいは次第に薄れていたのだろうか。この問題については、現地調査や歴史的史料の分析対象となり得る狩猟採集民に関する研究においては、これまで必ずしも明確な説明はなされてこなかった。アイヌについては、19世紀中期の三石場所のアイヌ集落で集団の空間的流動性の程度が定量化され、集落内の家と家は親子、兄弟姉妹関係にあることが多く、集落の血縁率は約70%であったこと (遠藤, 2006)、集団の空間的流動性の程度は、定住性の程度とは必ずしも関係しなかったことが示されている (遠藤, 2009)。しかし、集団の空間的流動性と定住性の程度が、集落の血縁率とどのように関わっているのかという問題については、まだ明らかにされていない。定住性が高くなると、集落の血縁率は下がるのだろうか。集団の空間的流動性が高くなると、集落の血縁率は下がるのだろうか。

本研究の目的は、1864~1869 (元治元~明治2) 年の東蝦夷地三石場所のアイヌ¹⁾の集落を例に、定住性と集団の空間的流動性が集落内居住者間の血縁親族関係とどのように関わっていたのかを検討することである。定住性としては、集落レベルでみた集落の存続期間と、家レベルでみた家の同一集落内滞在期間を取り上げた。三石場所のアイヌ社会は、政治的には1864~1868 (元治元~慶応4) には幕府、1868~1869 (明治元~明治2) 年には明治政府といういわゆる国家の体制下に組み込まれ、文化的には風俗習慣を和人 (当時の日本人) 風に変えようとする同化政策が実施されており、経済的にはとくに漁

業労働力や漁獲物の提供等において和人という外部社会との繋がりが既に形成されていた。

II. 史料と方法

1. 史料

分析に用いたのは、1856（安政3）年と1858（安政5）年の「松浦武四郎文書」（国文学研究資料館史料館蔵²⁾）に含まれる「野帳」、1860（安政7）年の「三石領資料」（北海道立図書館蔵）、1864（元治元）年と1865（慶応元）年の「町史編纂資料」（三石町郷土資料館蔵）、1868（慶応4）年の「ミツイシ御場所土人人名前家数書上」（静内町郷土館蔵）、1869（明治2）年の「三石・浦河両郡諸調」（北海道立文書館蔵）である。1864年と1865年の史料には戸主名のみが記されており、1856年の史料には戸主名と家族員数のほかに続柄（親族関係など）が部分的に記されている。1858年、1868年、1869年の史料には、ほぼ全員の名前、年齢、続柄（親族関係など）などが記されているが、1860年の史料については記述内容は同様であるものの少し欠損部分があり、必ずしも居住者全員の居住集落、名前、年齢、続柄などを復元することはできない。

2. 方法

1856（安政3）年、1858（安政5）年、1864（元治元）年、1865（慶応元）年、1868（慶応4）年、1869（明治2）年の6カ年分の史料³⁾を用いて、便宜上、第Ⅰ期（1856～1858）、第Ⅱ期（1858～1864）、第Ⅲ期（1864～1865）、第Ⅳ期（1865～1868）、第Ⅴ期（1868～1869）の5期に区分した。

集落レベルにおける定住性の程度を測定するにあたっては、集落の存続期間を用いた。集落の存続期間とは、集落到居住者が存在し続けた期間である。史料の制約上、集落の血縁率の分析が可能である1864～1869（元治元～明治2）年間を対象期間とする場合には、集落の存続期間は最短1年間、最長6年間である。これに対して、集落の血縁率がほぼ不

明である1856年と1858年をも加えた1856～1869（安政3～明治2）年間を対象期間とする場合には、集落の存続期間は最短1年間、最長14年間である（第1図）。集落の存続期間が長いほど「定住性は高い」と表現し、集落の存続期間が短いほど「定住性は低い」と表現することにする。

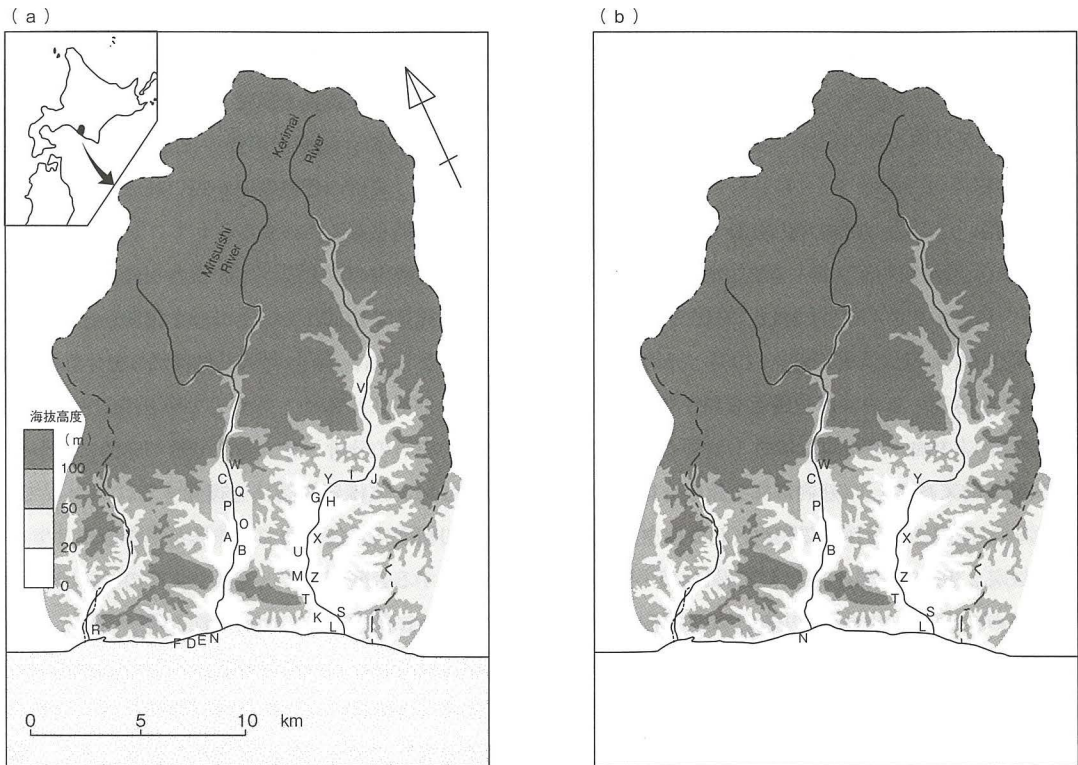
また集落内の家と家がどのような血縁親族関係にある構成員で結ばれていたのかを復元した。血縁親族関係としては、親子、兄弟姉妹関係⁴⁾を対象とした。先祖を共通にするかどうかという出自については、歴史的史料の分析という方法では部分的にしか復元できない。血縁親族関係を復元するにあたっては、復元の精度に居住者間での差異ができるだけ出ないようにする必要がある。そこで集落の居住者が誰でもお互いに認知できたと思われる親子関係と兄弟姉妹関係に着目した。集落内居住者間の血縁親族関係を知るうえでは、さしあたって親子関係と兄弟姉妹関係の復元で十分であると考えられる。そして血縁親族関係と集団の空間的流動性、集落の存続期間との関係を分析した。史料に戸主、妻、兄弟姉妹などと記された場合に、それは必ずしも生物学的な血縁関係のみを意味するものではなく、養子や後妻なども含むことになる。たとえ生物学的には他人に近くても、その社会で認知されている関係という意味での社会的な血縁関係を意味するものとする（遠藤、1997）。その上で集落の血縁率（BR）を次のように定義⁵⁾する（遠藤、2006）。

$$BR = b \div H \times 100$$

b ：集落内のほかの家と親子、兄弟姉妹関係で結びついている家数

H ：集落の総戸数

集団の空間的流動性の程度を測定するときには、集団の分裂のみではなく、結合による新たな集団の形成の双方を把握することが必要となる⁶⁾。集団の空間的流動性の程度を測定するにあたっては、集団



第1図 アイヌ集落の分布

(a) 1856～1869 (安政3～明治2) 年間に少なくとも1回は存在した集落の分布

(b) 1864～1869 (元治元～明治2) 年間に少なくとも1回は存在した集落の分布

A: ヘハウ, B: カムイコタン, C: スフシュツ, D: オハフ, E: コイトイ, F: ニノコシ, G: ウェンネツ, H: シュモ, I: クト, J: ショナイ, K: ハシネツ, L: ケリマフ, M: トクロシャモ, N: ミツイシ, O: シシャモナイ, P: ルベシベ, Q: キムンコタン, R: ブッシ, S: ワッカネベツ, T: シュモロ, U: タフカルニキ, V: モヒラ, W: ホロケナシ, X: トヨケナシ, Y: ホンキリ, Z: ニノミカルイシ
遠藤 (2006) に加筆・修正を施した。

の空間的流動性を「分裂の流動性」⁷⁾と「結合の流動性」⁸⁾の二つに分けた上で、各期(I～V)の集落ごとにそれぞれの流動性の程度を測定し、その値の経年変化を求めた(遠藤, 2006)。分裂の流動性の値(S)は、たとえば10戸の家から構成される集落が、1戸ずつ10集落へ分裂した場合には $S=0.1$ 、5戸ずつ2集落へ分裂した場合には $S=0.5$ 、10戸がそのまま一緒にほかの集落へ移動した場合には $S=1.0$ となる。Sの値が1に近いほど、「分裂の流動性は低い」と表現し、0に近いほど、「分裂の流動性は高い」と表現することにする。同様に、結合の流動

性の値(J)は、たとえば10戸の家から構成される集落で、1戸ずつ異なる10集落を前住地とする場合には $J=0.1$ 、5戸ずつ2集落を前住地とする場合には $J=0.5$ 、10戸がすべて前住地を同じくする場合には $J=1.0$ となる。Jの値が1に近いほど、「結合の流動性は低い」と表現し、0に近いほど、「結合の流動性は高い」と表現することにする。

III. 定住性の程度と集落の血縁率

1. 集落の存続期間

集落の血縁率の分析では、親子、兄弟姉妹という

血縁親族関係がある程度は復元可能である 1864（元治元）、1865（慶応元）、1868（慶応4）、1869（明治2）年の4カ年を対象とした。この4カ年の間に一時的にはあっても存在した集落は12集落（のべ39集落）である。この12集落の存続期間別の内訳は、存続期間6年間の8集落（のべ32集落）、2年間の3集落（のべ6集落）、1年間の1集落（のべ1集落）である。この1864～1869（元治元～明治2）年間に、存在し続けた集落は8集落、消滅した集落は3集落、新たに形成された集落は2集落⁹⁾である（第1表）。集落の存続期間の平均は、4.6年間である。

一方、集落の存続期間の分析では、1856（安政3）、1858（安政5）、1864（元治元）、1865（慶応元）、1868（慶応4）、1869（明治2）年の6カ年すべての史料が有効である。この6カ年の間に一時的にはあっても存在した集落は27集落（のべ39集落）である。この27集落の存続期間別の内訳は、存続期間14年間の3集落（のべ18集落）、12年間の2集落（のべ10集落）、8年間の2集落（のべ6集落）、6年間の3集落（のべ12集落）、2年間の1集落（のべ2集落）、1年間の16集落（のべ16集落）である。この1856～1869（安政3～明治2）年間に、存在し続けた集落は3集落、消滅した集落は18集落、新たに形成された集落は14集落である。集落の存続期間の平均は、8.6年間である。

2. 集落の存続期間と血縁率

それでは集落の存続期間と集落の血縁率にはどのような関係がみられたのであろうか。集落内居住者間の血縁親族関係は、入手できた史料上の制約から1856（安政3）年と1858（安政5）年についてはあまり復元することができない。1856年以後に婚姻などによって生じた個人の家間移動、あるいは親族関係などを示す記述によって、ある家の居住者とはかの家の居住者間の血縁親族関係などが分析に耐える程度に復元できるのは1864（元治元）年およびそれ以後のことである。

このように集落の血縁率については1864～1869（元治元～明治2）年の期間についてのみが復元できるが、集落の存続期間はより長期間の1856～1869（安政3～明治2）年について復元可能である。そこで対象期間を、集落の血縁率については1864～1869（元治元～明治2）年とし、集落の存続期間については1856～1869（安政3～明治2）年および1864～1869（元治元～明治2）年の二つに分けて分析する。

例えば、集落の存続期間を1864～1869年に限定した場合には、ヘハウ集落（A）の存続期間は6年間（1864～1869）であるが、集落の存続期間として1856～1869年を対象とすると存続期間は14年間（1856～1869）となる。同様に、ワッカンベツ集落（S）の存続期間は2年間（1864～1865）であったが、集落の存続期間の対象を1856～1869年とすると8年間（1858～1865）となる。

（1）対象期間を1864～1869（元治元～明治2）年とする場合

集落の存続期間についても血縁率と同様に、1864～1869（元治元～明治2）年を対象期間とする。存続期間が1年間の集落は、1868（慶応4）年にのみ存在したことが確認できる戸数3戸のニノミカルイシ集落（Z）であり、集落の血縁率は100%であった（第2表）。存続期間が2年間の集落は、1868（慶応4）年と1869（明治2）年に存在したヌフシュツ集落（C）、1864（元治元）年と1865（慶応元）年に存在したことが確認できるワッカンベツ集落（S）とシュモロ集落（T）の3集落（のべ6集落）である。集落の血縁率は、ヌフシュツ集落（C）では1868年に28.6%、1869年に40.0%である。ワッカンベツ集落（S）では1864年に66.7%、1865年に0%であり、シュモロ集落（T）では1864年に100.0%、1865年に100.0%である。存続期間が2年間の3集落（のべ6集落）の場合、集落の血縁率の平均は、55.9%であった。

存続期間が6年間の集落は、1864（元治元）年、

第1表 三石場所におけるアイヌ集落の戸数と存続期間

集 落	集落の戸数 (戸)						集落の存続期間 (年)	
	安政3 (1856)	安政5 (1858)	元治元 (1864)	慶応元 (1865)	慶応4 (1868)	明治2 (1869)	1856-1869 年間の場合	1864-1869 年間の場合
A ヘハウ	11	4	4	4	10	10	14	6
B カムイコタン	10	13	11	12	4	4	14	6
C ヌフシュツ	9				7	5	1, 2	2
D オハフ	2						1	
E コイトイ	1						1	
F ニノコシ	3						1	
G ウェンネツ	1						1	
H シュモ	2						1	
I クト	3						1	
J ショナイ	2						1	
K ハシネツ	1						1	
L ケリマフ	1	2	2	3	3	3	14	6
M トクロシャモ	3						1	
N ミツイシ		1	1	1	1	1	12	6
O シシャモナイ		5					1	
P ルベシベ		13	19	17	2	1	12	6
Q キムンコタン		3					1	
R ブッシ		1					1	
S ワッカンベツ		2	3	2			8	2
T シュモロ		7	3	3			8	2
U タフカルニキ		4					1	
V モヒラ		1					1	
W ホロケナシ			7	10	17	20	6	6
X トヨケナシ			4	4	3	2	6	6
Y ホンキリ			8	8	12	14	6	6
Z ニノミカルイシ					3		1	1
集落数	13	12	10	10	10	9		
戸 数 (戸)	49	56	62	64	62	60		
人 口 (人)	224	225		248	270	258		
1集落当たり戸数 (戸)	3.8	4.7	6.2	6.4	6.2	6.7		
1集落当たり人口 (人)	17.2	18.8		24.8	27.0	28.7		

アルファベットは集落を示し第1図と一致する。

「松浦武一郎文書」, 「三石領資料」, 「町史編纂資料」, 「ミツイシ御場所土人別名前家数書上」, 「三石・浦河両郡諸調」により作成。

遠藤 (1997) を修正のうえで集落の存続期間を加えた。

1865 (慶応元), 1868 (慶応4), 1869 (明治2) 年に存在したことが確認できるヘハウ集落 (A), カムイコタン (B) 集落, ケリマフ集落 (L), ミツイシ集落 (N), ルベシベ集落 (P), ホロケナシ集落 (W), トヨケナシ集落 (X), ホンキリ集落 (Y) の8集落 (の

べ32集落) である。このうちケリマフ集落 (L) は4カ年のいずれにおいても戸数は1戸であり, 1869 (明治2) 年のルベシベ集落 (P) も戸数は1戸であった。この戸数が1戸の集落 (のべ5戸) をも対象に含めた場合には, のべ32集落の血縁率の平均は

第2表 集落の存続期間ごとにみた血縁率

集 落	集落の存続期間 (年)	集 落 の 血 縁 率 (%)					
		1864 (元治元)	1865 (慶応元)	1868 (慶応4)	1869 (明治2)	平均	
A ヘハウ	14 (6)	50.0	50.0	60.0	60.0	55.0	65.4
B カムイコタン	14 (6)	72.7	66.7	50.0	75.0	66.1	
L ケリマフ	14 (6)	100.0	66.7	66.7	66.7	75.0	
N ミツイシ	12 (6)	100.0*	100.0*	100.0*	100.0*	100.0	75.7
P ルベシベ	12 (6)	52.6	52.9	0.0	100.0*	51.4	(35.2)
S ワッカンベツ	8 (2)	66.7	0.0			33.4	66.7
T シュモロ	8 (2)	100.0	100.0			100.0	
W ホロケナシ	6 (6)	71.4	80.0	64.7	85.0	75.3	86.7
X トヨケナシ	6 (6)	100.0	100.0	66.7	100.0	91.7	
Y ホンキリ	6 (6)	87.5	100.0	91.7	92.9	93.0	
C ヌフシュツ	2 (2)			28.6	40.0	34.3	34.3
Z ニノミカルイシ	1 (1)			100.0		100.0	100.0
平 均		80.1 (77.9)	71.6 (68.5)	62.8 (58.7)	80.0 (74.2)	73.6 (69.8)	

*：戸数が1戸の集落を示す。血縁率で（）内の数値は戸数が1戸の集落（血縁率100%）を除いた場合のものである。

アルファベットは集落を示し第1図と一致する。

「松浦武四郎文書」, 「三石領資料」, 「町史編纂資料」, 「ミツイシ御場所土人別名家数書上」, 「三石・浦河両郡諸調」により作成

73.6%であったが、戸数が1戸の集落を除いた場合、のべ27集落（32-5=27）の血縁率の平均は69.8%であった。

このように、集落の存続期間を1年間、2年間、6年間と3区分した場合に、それぞれの集落の血縁率が得られた（第3表-a）。集落の存続期間に応じて集落の血縁率の間に有意な関連性があるかどうかを検定した結果、5%水準で有意な関連性は無いことが確認された¹⁰⁾。つまり、集落の存続期間と血縁率の間にはとくに関係は無かった。

(2) 対象期間を1856～1869（安政3～明治2）年とする場合

存続期間が1年間の集落は、1868（慶応4）年にのみ存在したニノミカルイシ集落（Z）であり（のべ1集落）、存続期間が2年間の集落は、1868（慶応4）年と1869（明治2）年に存在したヌフシュツ

集落（C）である（のべ2集落）。存続期間が6年間の集落は、1864（元治元）、1865（慶応元）、1868（慶応4）、1869（明治2）年に存在したホロケナシ集落（W）、トヨケナシ集落（X）、ホンキリ集落（Y）の3集落（のべ12集落）であり、存続期間が8年間の集落は、1858（安政5）、1864（元治元）、1865（慶応元）年に存在したワッカンベツ集落（S）とシュモロ集落（T）の2集落（のべ6集落）である。存続期間が12年間の集落は、1858（安政5）、1864（元治元）、1865（慶応元）、1868（慶応4）、1869（明治2）年に存在したミツイシ集落（N）とルベシベ集落（P）の2集落（のべ10集落）である。そして存続期間が14年間の集落は、1856（安政3）、1858（安政5）、1864（元治元）、1865（慶応元）、1868（慶応4）、1869（明治2）年に存在したヘハウ集落（A）、カムイコタン（B）集落、ケリマフ集落（L）の3集

第3表 集落の存続期間別にみた集落の血縁率

(a) 対象期間を1864～1869(元治元～明治2)とするとき

集落の存続期間 (年)	のべ集落数	集落の血縁率 (%)					平均 (%)
6	32	50.0	50.0	60.0	60.0	72.7	75.9
		66.7	50.0	75.0	100.0	66.7	
		66.7	66.7	100.0	100.0	100.0	
		100.0	52.6	52.9	0.0	100.0	
		71.4	80.0	64.7	85.0	100.0	
		100.0	66.7	100.0	87.5	100.0	
		91.7	92.9				
2	6	66.7	0.0	100.0	100.0	28.6	55.9
		40.0					
1	1	100.0					100.0
計	39						73.5

(b) 対象期間を1856～1869(安政3～明治2)とするとき

集落の存続期間 (年)	のべ集落数	集落の血縁率 (%)					平均 (%)
14	12	50.0	50.0	60.0	60.0	72.7	65.4
		66.7	50.0	75.0	100.0	66.7	
		66.7	66.7				
12	8	100.0	100.0	100.0	100.0	52.6	75.7
		52.9	0.0	100.0			
8	4	66.7	0.0	100.0	100.0		66.7
6	12	71.4	80.0	64.7	85.0	100.0	86.7
		100.0	66.7	100.0	87.5	100.0	
		91.7	92.9				
2	2	28.6	40.0				34.3
1	1	100.0					100.0
計	39						73.5

「松浦武四郎文書」, 「三石領資料」, 「町史編纂資料」, 「ミツイシ御場所土人
人別名前家数書上」, 「三石・浦河両郡諸調」により作成。

落(のべ18集落)である(第3表-b)。

このように、集落の存続期間が1年間、2年間、6年間、8年間、12年間、14年間と6区分される場合に、それぞれの集落の血縁率が得られた。集落の存続期間に応じて集落の血縁率の間に有意な関連性があるかどうかを検定した結果、5%水準で有意な関

連性は無いことが確認された¹¹⁾。

同様に、集落の存続期間を1年と2年に分けずに1～2年と一括して、戸数が1戸のニノミカライシ集落(N)を対象から外しても、集落の存続期間と集落の血縁率の間には5%水準で有意な関連性は無いことが確認された¹²⁾。

(3) 集落の存続期間と血縁率の平均値に基づく
分析

集落の存続期間の平均 4.6 年（対象期間が 1864～1869 年の場合）もしくは 8.6 年（対象期間が 1856～1869 年の場合）を基準として、平均よりも長い、短い、2 区分ごとに集落の血縁率が平均 73.6% よりも高いか、低いのかの別に有意な関連性があるかどうかを検定した。その結果、集落の存続期間の平均を 4.6 年とする場合、有意水準 5% で「集落の存続期間の別と血縁率の違いには関連が無い」といえる¹³⁾。同様に、存続期間の平均を 8.6 年とする場合、有意水準 5% で「集落の存続期間の別と血縁率の違いには関連が無い」といえる。つまり集落の存続期間の別と血縁率の違いには関連が無さそうである。

戸数が 1 戸の集落を除いた場合、存続期間が 4.6 年間よりも短い集落の血縁率の平均は 62.2% であり、存続期間が 4.6 年を越える集落の血縁率の平均は 75.2% であった。戸数が 1 戸の集落をも対象に含めた場合には、存続期間が 4.6 年間よりも短い集落の血縁率の平均は 62.2% であり、存続期間が 4.6 年を越える集落の血縁率の平均は 75.9% であった。このように、むしろ存続期間が長い集落において血縁率はより高かったように見えたが、検定の結果は、集落の存続期間の別と血縁率の違いには関連が無いことを示している。

以上のことから、集落の存続期間と血縁率の間には関連性がないと判断される。集落の存続期間が長くなると血縁率は下がるという傾向はなかったと判断される。

3. 家の同一集落内滞在期間と集落の血縁率

A2 家は、1864（元治元）年にカムイコタン集落（B）に居住していたが、1865（慶応元）年、1868（慶応 4）年、1869（明治 2）年にはホロケナシ集落（W）に居住していた。このように A2 家の存続期間は 1864 年から 1869 年にかけての 6 年間である。A2 家の同

一集落内滞在期間は、それぞれ 1864 年の 1 年、1865～1869 年間の 5 年間となる。そこで 1864～1869（元治元～明治 2）年間における A2 家の同一集落内滞在期間の平均は、3 年 $((1+5)/2)$ となる。同様に、C5 家は、1864（元治元）年にルベシベ集落（P）に居住していたが、1865（慶応元）年にもルベシベ集落（P）に居住し、1868（慶応 4）年にはヌフシュツ集落（C）、1869（明治 2）年にはカムイコタン集落（B）に居住していた。C5 家の存続期間は 1864 年から 1869 年にかけての 6 年間であり、C5 家の同一集落内滞在期間は、それぞれ 1864～1865 年の 2 年、1868 年の 1 年、1869 年の 1 年となり、同一集落内滞在期間の平均は 1.3 年 $((2+1+1)/3)$ となる。こうして、A2 家や C5 家のように家の存続期間が最長の 6 年間（1864～1869）である 49 戸の家すべてを対象として、家ごとに同一集落内の平均滞在期間を求めた。次に、1864～1869（元治～明治 2）年の 6 年間に 49 戸の家がそれぞれ滞在した各集落の血縁率の平均を算出した。

A2 家の場合には、1864 年にカムイコタン集落（B）、1865 年、1868 年、1869 年にはホロケナシ集落（W）に居住していたので、のべ 4 集落の血縁率の平均は 75.6% $((72.7+80+64.7+85)/4)$ となる。C5 家の場合には、1864 年と 1865 年にルベシベ集落（P）、1868 年にはヌフシュツ集落（C）、1869 年にはカムイコタン集落（B）に居住していたので、のべ 4 集落の血縁率の平均は 52.3% $((52.6+52.9+28.6+75)/4)$ となる。こうして 49 戸の家がそれぞれ居住した集落ごとの血縁率の平均値が、同一集落内の平均滞在期間に応じてどのように変化するかを分析した（第 4 表）。その結果、同一集落内の滞在期間が最も短い 1.3 年間の場合に集落の血縁率は 76.1% と最も高く、同一集落内の滞在期間が 2 年間の場合に集落の血縁率は 61.0% と最も低かった。そして、同一集落内の滞在期間が 2 年間から 3 年間、6 年間と長くなるにつれて集落の血縁率も 61.0% から

第4表 49戸の家の同一集落内滞在期間別にみた集落の血縁率

家の同一集落内滞在期間 (年)	49戸の家が居住した のべ集落数	集落の血縁率 (%)					平均 (%)
6	17	55.0	55.0	55.0	66.1	66.1	74.5
		100.0	51.4	75.3	75.3	75.3	
		75.3	75.3	75.3	91.7	91.7	
		91.7	91.7				
3	5	75.6	68.6	70.6	70.6	66.7	70.4
2	21	64.9	64.9	64.9	64.9	87.8	61.0
		87.8	43.5	43.5	63.8	43.5	
		63.8	63.8	56.4	63.8	63.8	
		63.8	63.8	43.5	50.0	50.0	
		67.9					
1.3	6	54.8	54.8	52.3	98.2	98.2	76.1
		98.2					
計	49						68.5

「松浦武四郎文書」,「三石領資料」,「町史編纂資料」,「ミツイシ御場所土人別名家数書上」,「三石・浦河両郡諸調」により作成。

70.4%, 74.5%と次第に高まる傾向が見られた。しかし、同一集落内滞在期間の別と集落の血縁率の間にはとくに関連性がないことが有意水準5%で確認された¹⁴⁾。同一集落内滞在期間の平均は3.4年間であるので、3.4年間よりも長いかどうかで2区分として集落の血縁率との関係をもても、同一集落内滞在期間の別と集落の血縁率の間には関連性がないことが有意水準5%で確認された¹⁵⁾。したがって、家の同一集落内滞在期間が長くなっても、集落の血縁率がとくに低下することはないと判断される。

1864~1869(元治元~明治2)年における49戸の家の同一集落内の平均滞在期間と集落間移動回数の関係を整理すると、同一集落内滞在期間が6年間の家はすべて移動回数は0である。滞在期間が3年間と2年間の家は、移動回数は1回であり、滞在期間が1.3年間の家は、移動回数は2回である。同一集落内の平均滞在期間が長くなるほど、集落間移動回数はゼロに近づくことになる。このように、同一集落内の滞在期間あるいは集落間移動回数が必ずしも集落の血縁率とは関連していなかった。これは、三

石場所のアイヌ集落にみられた集団の空間的流動性が、同一集落内に定住する家と集落間で移動する家の組み合わせで生じていた(遠藤, 2009)ためと考えられる。

つまり、家というレベルから集落の血縁率をみると次のようになる。集落間で頻繁に移動する家の場合は、自らの居住する集落の血縁率を比較的に高い状態で維持していた。同様に、存続期間の長い集落にそのまま長く居住し続ける家の場合にも、自らの居住する集落の血縁率を比較的に高い状態で維持していたことになる。一方、家の同一集落内の滞在期間が2年を越えて長くなっても、居住する集落の血縁率が低下することはない、これは家が定住性を高めることは必ずしも集落の血縁率の低下には結び付かないことを示している。

IV. 集団の空間的流動性と血縁率

1. 分裂の流動性と集落の血縁率

集団の空間的流動性の程度と集落の血縁率の関係はどのようなものであったのであろうか。分裂の流

動性の場合には（第2図-a）、第Ⅲ期（1864～1865）、第Ⅳ期（1865～1868）、第Ⅴ期（1868～1869）の3期間が対象となる。この3期間における1集落あたりの分裂の流動性の平均は $S=0.86$ であり、1集落あたりの血縁率の平均は71.5%である¹⁶⁾。そのなかでも分裂の流動性が高い集落（ $S<0.86$ ）においては、集落の血縁率の平均は59.7%とより低い値であった。

例えば、ヌフシュツ集落（C）の場合、1868（慶応4）年の集落の血縁率は28.6%とかなり低く、第Ⅴ期（1868～1869）の分裂の流動性は非常に高かった（ $S=0.43$ ）。1868年のヌフシュツ集落は7戸の家で構成されていたが、このうち2戸のみが親子、兄弟姉妹関係で結ばれており、1869年までの間にはこの2戸と一緒にホロケナシ集落（W）へ移動し、1戸がカムイコタン集落（B）へ移動し、4戸はそのままヌフシュツ集落に残っていた。このように7戸の家は、2戸、1戸、4戸と三つに分裂したが、親子、兄弟姉妹関係にある2戸の家は1戸ずつにさらに分裂することはなかった¹⁷⁾。同様に、1868年のカムイコタン集落（B）の血縁率は50.0%と低く第Ⅴ期（1868～1869）の分裂の流動性は非常に高かった（ $S=0.63$ ）。

それでは、総じて親子、兄弟姉妹関係を絆とする家と家によって集落の母体が形成されてはいたものの、血縁率がより低い集落ではその家々は各地に分散する程度がより高い傾向があるのだろうか。第Ⅲ期、第Ⅳ期、第Ⅴ期のそれぞれ初年に相当する1864（元治元）、1865（慶応元）、1868（慶応4）年それぞれの各集落の血縁率と各期における各集落の分裂の流動性の値との相関係数を算出すると、 $r=0.274$ となる。有意水準5%で、集落の血縁率と分裂の流動性の間には相関が無いといえる¹⁸⁾。同様に、集落の血縁率と分裂の流動性の値の平均値（ $S=0.86$ ）を用いても、5%水準で、「平均値よりも高いか、低いかによる集落の血縁率と分裂の流動性そ

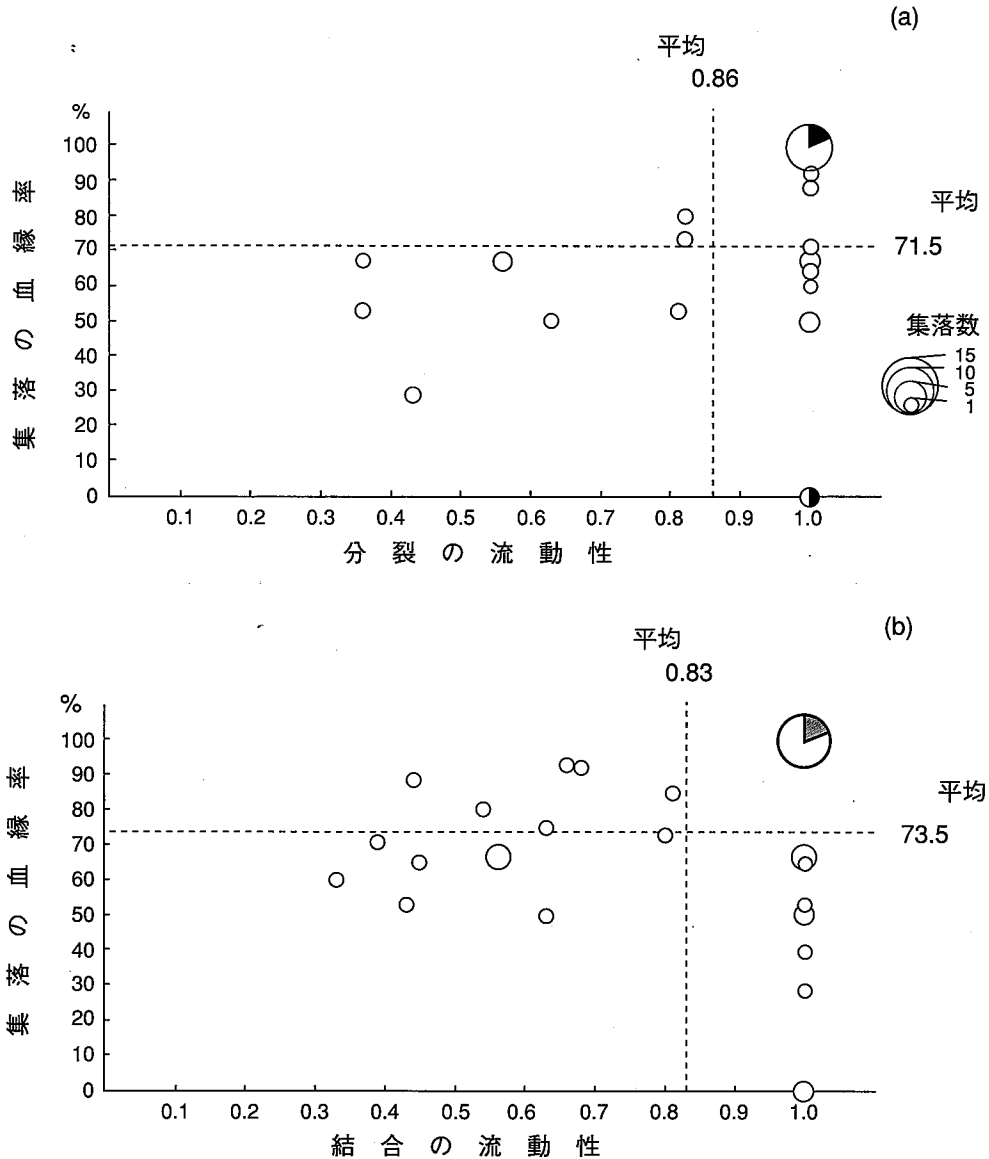
れぞれ2区分の間には関連が無い」といえる¹⁹⁾。ここで、分裂の流動性が平均値（ $S=0.86$ ）よりも低い事例は、すべて分裂しなかった事例（ $S=1.0$ ）である。

以上のことから、分裂の流動性の程度と血縁率の間にはとくに関連性はないと判断される。集落の血縁率が低いと分裂の流動性が高いという傾向はとくに無かったと判断される²⁰⁾。

2. 結合の流動性と集落の血縁率

一方、結合の流動性の場合には（第2図-b）、第Ⅱ期（1858～1864）、第Ⅲ期（1864～1865）、第Ⅳ期（1865～1868）、第Ⅴ期（1868～1869）の4期間が対象となる。各期の末年である1864（元治元）年、1865（慶応元）年、1868（慶応4）年、1869（明治2）年の4カ年を対象とすると、1集落あたりの結合の流動性の平均は $J=0.83$ であり、1集落あたりの血縁率の平均は73.5%であった²¹⁾。そのなかで結合の流動性が高い集落（ $J<0.83$ ）のみに着目すると、集落の血縁率の平均は65.8%と少し低くなる。

例えば、ヘハウ集落（A）の場合、第Ⅳ期（1865～1868）の結合の流動性は非常に高かった（ $J=0.33$ ）が、1868（慶応4）年の血縁率は60.0%であった。ヘハウ集落（A）では第Ⅲ期（1864～1865）、第Ⅳ期（1865～1868）、第Ⅴ期（1868～1869）においては集落の分裂は生じなかった（ $S=1.0$ ）ものの、第Ⅳ期（1865～1868）にはカムイコタン集落（B）から4戸が、ルベシベ集落（P）から1戸が、ホロケナシ集落（W）から1戸がヘハウ集落（A）へ移動してきた。1865年からヘハウ集落に居住していた3戸および第Ⅳ期に何処からか移動してきた1戸、および新たに形成された1戸とともに1868年には10戸の家から構成される集落を形成した。ヘハウ集落（A）にすでに居住していた3戸のうち2戸、カムイコタン集落（B）から移動してきた4戸のなかの3戸、新たに形成された1戸とがそれぞれ親子、兄弟姉妹関係にあり、血縁率は60.0%となった。同



第2図 集落の血縁率と分裂・結合の流動性別にみた集落数

(a) 分裂の流動性と集落の血縁率

血縁親族関係と分裂の流動性の分析が可能である1864(元治元), 1865(慶応元), 1868(慶応4)年の30集落, 187戸を対象とした。濃いアミは消滅した集落を示す。

(b) 結合の流動性と集落の血縁率

血縁親族関係と結合の流動性の分析が可能である1864(元治元), 1865(慶応元), 1868(慶応4), 1869(明治2)年の39集落, 242戸を対象とした。薄いアミは新たに形成された集落を示す。

「松浦武四郎文書」, 「三石領資料」, 「町史編纂資料」, 「ミツイシ御場所土人別名家数書上」, 「三石・浦河両郡諸調」により作成。

様に、第Ⅱ期（1858～1864）のホロケナシ集落（W）の結合の流動性は高かった（ $J=0.39$ ）が、血縁率は71.4%と比較的に高い値であった。このように、前住集落を異にする家が集合して形成された集落ではあったが、結合の流動性が高い集落（ $J<0.83$ ）においても集落の血縁率は比較的に高く、親子、兄弟妹関係を絆とする家と家によってつねに集落の母体が形成されていたことが判る。

それでは、様々な集落から移動してきた家によって形成された集落ほど、集落の血縁率がより低いという傾向があるといえるだろうか。第Ⅲ期、第Ⅳ期、第Ⅴ期のそれぞれ末年に相当する1865（慶応元）、1868（慶応4）年、1869（明治2）年それぞれの各集落の血縁率と各期における各集落の結合の流動性の値との相関係数を算出すると、 $r=-0.014$ となる。有意水準5%で、集落の血縁率と結合の流動性の間には相関が無いといえる²²⁾。同様にして、集落の血縁率と結合の流動性の値の平均値を用いても、有意水準5%で、「平均値よりも高いか、低いかによる集落の血縁率と結合の流動性それぞれ2区分の間には関連が無い」といえる²³⁾。ここで、結合の流動性が平均値（ $J=0.86$ ）よりも低い事例は、すべて結合しなかった事例（ $J=1.0$ ）である。

以上のことから、結合の流動性の程度と血縁率の間にはとくに関連性はないと判断される。結合の流動性が高いと集落の血縁率が低いという傾向はとくに無かったと判断される²⁴⁾。

このように、分裂の流動性と結合の流動性に分けて集落の血縁率との関係を分析した結果、集団の空間的流動性は集落の血縁率を必ずしも低下させないことが判った。対象期間中に集団の空間的流動性が生じていながらも、集落の血縁率は平均して73.6%と比較的に高い値であった。「かつて同じ家で暮らした親子、兄弟姉妹が結婚を契機に居住集落を異にした後になっても、それぞれが移動することによって同じ集落でまた一緒に暮らしていた」という血縁

共住機能がアイヌの集団の空間的流動性には備わっていたと考えられる（遠藤，2006）。この血縁共住機能には、集落の血縁率をある程度の高さに維持する機能も含まれていると考えられる。

V. 集落の血縁率の変動とその要因

1. 集落の血縁率の変動

複数年にわたって同じ場所に集落が形成され続いていた場合に、集落の血縁率はどのように変動していたのだろうか。集落の存続期間が2年間以上の場合、つまり1864（元治元）年、1865（慶応元）、1868（慶応4）、1869（明治2）年の4カ年のなかで、少なくとも連続する2カ年に集落が存続し続けた集落は11集落である。この11集落は、存続期間が6年間（1864～1869）の8集落、存続期間が2年間（1864～1865）の2集落、同じく存続期間が2年間（1868～1869）の1集落である。

例えば、存続期間が6年間（1864～1869）のへハウ集落（A）の場合、集落の血縁率は1864（元治元）年に50.0%、1865（慶応元）に50.0%、1868（慶応4）に60.0%、1869（明治2）年に60.0%であった。この場合、血縁率の変動率（絶対値）は、第Ⅲ期（1864～1865）に0%、第Ⅳ期（1865～1868）に20%、第Ⅴ期（1868～1869）に0%であり、平均すると6.7%となる。一方、存続期間が6年間のルベシベ集落（P）の場合、集落の血縁率は1864（元治元）年に52.6%、1865（慶応元）に52.9%、1868（慶応4）に0.0%、1869（明治2）年に100.0%であった。血縁率の変動率（絶対値）は、第Ⅲ期（1864～1865）に0.6%、第Ⅳ期（1865～1868）に100.0%、第Ⅴ期（1868～1869）に100.0%であり、平均すると66.9%という大きな変動率であった。11集落のすべてを対象として集落の血縁率の変動率（絶対値）を算出すると、平均24.0%となる。

ここで、1864（元治元）、1865（慶応元）、1868（慶応4）、1869（明治2）年の4カ年の居住集落がすべ

て確認できる49戸の家を対象として、それぞれの家が居住した集落を追跡することから、どの程度の血縁率の変動を経験したのかを復元した(第5表)。対象期間中に居住した集落において、全く血縁率の変動を経験しなかった家は4.1%(2/49)にすぎない。つまり95.9%(47/49)の家が居住集落の血縁率の変動を経験していたことになる。第Ⅲ期(1864~1865)、第Ⅳ期(1865~1868)、第Ⅴ期(1868~1869)の3期に49戸の家が居住した集落の血縁率の変動率(絶対値)は、平均すると24.3%であった。

対象としたのべ39集落のなかで、血縁率が50%未満であるのは4集落であったが、49戸の家のなかで常に血縁率が50%未満の集落に居住し続けたのは1戸も無かった。4カ年の居住集落すなわち4回の居住記録のなかで、血縁率が50%未満の集落に1回のみ居住した家は6戸(12.2%)、2回居住した家は4戸(8.2%)にすぎない。したがって、79.6%(39/49)の家は常に血縁率が50%以上の集落に居住していたことになる。このように、アイヌ集落にみられる集団の空間的流動性には、血縁共住機能が備わっていると考えられる。

2. 集落の血縁率の変動する要因

集落の血縁率はなぜ変動していたのだろうか。例えば、ヘハウ集落(A)の場合、1864(元治元)年と1865(慶応元)年の戸数は4戸であり集落の血縁率はいずれも50%であったが、血縁親族関係にあった2戸のうち1戸は居住者の死亡により絶家したので、戸数は3戸となる。集落構成が変わらないと仮定すると血縁率は0%となるが、実際には第Ⅳ期(1865~1868)に様々な集落から家がヘハウ集落へ移動してきたので結合の流動性($J=0.33$)が生じ、1868(慶応4)年と1869(明治2)年には10戸となり血縁率は60%であった。この50%から60%への血縁率の変動(変動率20%)には、居住者の死亡と集団の空間的流動性(結合の流動性)が関わっていると考えられる。

1864~1869(元治元~明治2)年間に集落の血縁率の変動した事例は18例であった(第2表)。この18例において集落の血縁率を変動させた要因として、①集団の空間的流動性、②居住者の死亡、③集落内での婚姻、④集落内での血縁親族の新戸(分家)形成、⑤集落内での家と家の合体、という5つのものが見いだされた(第6表)。このなかで集落の血縁率を変動させた要因として最も重要であったのは、集団の空間的流動性である。集団の空間的流動性のみで血縁率の変動した事例は全体の50%(9/18)である。ほかの要因との複合的なものも含めると、72.2%(13/18)が空間的流動性と関わっていたことになる。理論的には5つの要因のどれをもってしても集落の血縁率は変動し得ると考えられる。しかし、1864~1869(元治元~明治2)年間に生じた集落の血縁率の変動に限ると、集団の空間的流動性が重要であった。

3. 定住性と集落の血縁率

一般には定住性が高くなった場合、つまり集落の存続期間が長くなり、家の同一集落内滞在期間が長くなった場合、集落の血縁率は時間の経過とともに低下すると考えられる。

例えば、日本の東北地方の農村社会でみられた同族という本家と分家から構成された家集団においては、本家の居住者の実子(血縁親族)のみが分家するとは限らず、本家を草鞋脱ぎ場として同居した非親族が分家することもある。これを広義の血縁親族としても、時間の経過とともに居住者の世代交代が進むと本家-分家間の居住者相互の血縁親族関係は、相互間に新たな婚姻関係などが生じない限りは、次第に薄れることになる。それでも本家-分家関係という家の系譜関係を絆として結びつき続けていたのが同族といえる(有賀, 1937, 1962; 中野, 1957; 及川, 1967; 喜多野, 1976; 鳥越, 2000)。

このように、集落内の家間での血縁親族関係は次第に薄れても本家-分家関係という家の系譜関係が

第5表 49戸の家が居住した集落の血縁率とその変動

家	集落の血縁率 (%)				集落の血縁率の変動 (%)			変動率の絶対値 の平均
	元治元 1864	慶応元 1865	慶応4 1868	明治2 1869	III 1864-1865	IV 1865-1868	V 1868-1869	
1	50.0	50.0	60.0	60.0	0.0	20.0	0.0	6.7
2	50.0	50.0	60.0	60.0	0.0	20.0	0.0	0.0
3	50.0	50.0	60.0	60.0	0.0	20.0	0.0	0.0
4	72.7	80.0	64.7	85.0	10.0	-19.1	31.4	20.2
5	72.7	66.7	60.0	60.0	-8.3	-10.0	0.0	6.1
6	72.7	66.7	60.0	60.0	-8.3	-10.0	0.0	6.1
7	72.7	66.7	60.0	60.0	-8.3	-10.0	0.0	6.1
8	72.7	66.7	50.0	75.0	-8.3	-25.0	50.0	27.8
9	72.7	66.7	50.0	85.0	-8.3	-25.0	70.0	34.4
10	72.7	66.7	60.0	60.0	-8.3	-10.0	0.0	6.1
11	72.7	66.7	50.0	75.0	-8.3	-25.0	50.0	27.8
12	100.0	66.7	91.7	92.9	-33.3	37.5	1.3	24.0
13	100.0	66.7	91.7	92.9	-33.3	37.5	1.3	24.0
14	100.0	100.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
15	52.6	52.9	28.6	40.0	0.6	-45.9	39.9	28.8
16	52.6	52.9	28.6	40.0	0.6	-45.9	39.9	28.8
17	52.6	52.9	28.6	85.0	0.6	-45.9	197.2	81.2
18	52.6	52.9	28.6	85.0	0.6	-45.9	197.2	81.2
19	52.6	52.9	64.7	85.0	0.6	22.3	31.4	18.1
20	52.6	52.9	28.6	40.0	0.6	-45.9	39.9	28.8
21	52.6	52.9	64.7	85.0	0.6	22.3	31.4	18.1
22	52.6	52.9	64.7	85.0	0.6	22.3	31.4	18.1
23	52.6	52.9	60.0	60.0	0.6	13.4	0.0	4.7
24	52.6	52.9	64.7	85.0	0.6	22.3	31.4	18.1
25	52.6	52.9	64.7	85.0	0.6	22.3	31.4	18.1
26	52.6	80.0	64.7	85.0	52.1	-19.1	31.4	34.2
27	52.6	52.9	64.7	85.0	0.6	22.3	31.4	18.1
28	52.6	52.9	28.6	75.0	0.6	-45.9	162.2	69.6
29	52.6	52.9	64.7	85.0	0.6	22.3	31.4	18.1
30	52.6	52.9	0.0	100.0	0.6	-100.0	100.0*	66.9
31	52.6	52.9	28.6	40.0	0.6	-45.9	39.9	28.8
32	52.6	80.0	64.7	85.0	52.1	-19.1	31.4	34.2
33	66.7	0.0	66.7	66.7	-100.0	100.0*	0.0	66.7
34	66.7	0.0	66.7	66.7	-100.0	100.0*	0.0	66.7
35	66.7	66.7	66.7	66.7	0.0	0.0	0.0	0.0
36	100.0	100.0	100.0	92.9	0.0	0.0	-7.1	2.4
37	100.0	100.0	100.0	92.9	0.0	0.0	-7.1	2.4
38	100.0	100.0	100.0	92.9	0.0	0.0	-7.1	2.4
39	71.4	80.0	64.7	85.0	12.0	-19.1	31.4	20.8
40	71.4	80.0	64.7	85.0	12.0	-19.1	31.4	20.8
41	71.4	80.0	64.7	85.0	12.0	-19.1	31.4	20.8
42	71.4	80.0	60.0	60.0	12.0	-25.0	0.0	12.3
43	71.4	80.0	64.7	85.0	12.0	-19.1	31.4	20.8
44	71.4	80.0	64.7	85.0	12.0	-19.1	31.4	20.8
45	71.4	80.0	64.7	85.0	12.0	-19.1	31.4	20.8
46	100.0	100.0	66.7	100.0	0.0	-33.3	49.9	27.7
47	100.0	100.0	66.7	100.0	0.0	-33.3	49.9	27.7
48	100.0	100.0	66.7	100.0	0.0	-33.3	49.9	27.7
49	100.0	100.0	66.7	100.0	0.0	-33.3	49.9	27.7
平均								24.3

1864（元治元）、1865（慶応元）、1868（慶応4）、1869（明治2）年の4カ年の居住集落が確認できる49戸の家を対象とした。

破線の括りは1864（元治元）年における各集落を示す。

*：集落の血縁率の変動率を算出するにあたって分母が0の場合には、100%とした。

「松浦武四郎文書」、「三石領資料」、「町史編纂資料」、「ミツイシ御場所土人人名前家数書上」、「三石・浦河両郡諸調」により作成。

第6表 集落の血縁率の変動する要因

集落の血縁率の変動する要因	事例数
① 集団の空間的流動性	9
② 集落内での居住者の死亡	0
③ 集落内での婚姻	0
④ 集落内での血縁親族の新戸形成	0
⑤ 集落内での家と家の合併	1
①+②	1
①+③	1
①+②+④	1
①+④+⑤	1
②+⑤	1
その他	3
計	18

その他：居住集落が不明のため要因を特定できない事例を示す。

「松浦武四郎文書」, 「三石領資料」, 「町史編纂資料」, 「ミツイシ御場所土人別名家数書上」, 「三石・浦河両郡諸調」により作成。

家と家を結び付ける紐帯としての意味を持ち続けることは、「血縁から地縁へ」の変化ともいえる。同じようなことが、世界にみられるような父系や母系の出自という系譜関係に基づく集団によって形成される集落においても当てはまると考えられる。例えば、父-子関係にある複数の家が集落を形成している場合には、集落という地縁集団は血縁集団でもあるが、世代交代が進むと出自の系譜関係は辿れるにしても実質的にはお互いの血縁親族関係は薄れていくと考えられる。

しかしながら、定住性の高いアイヌ集落においては、集落の存続期間と家の同一集落内滞在期間が長くなっても、集落の血縁率は必ずしも低下しなかった。これには、集団の空間的流動性の形成過程と機能が大きく関わっていると考えられる。三石場所のアイヌ集落における集団の空間的流動性は、移動する家と移動する家の組み合わせによって生じていたのではなく、定住する家と移動する家の組み合わせによって生じており（遠藤，2009），しかも血縁共住機能が備わっていたためと考えられる。集落内で

婚姻が生じること、集落内で血縁親族が新戸（分家）を形成すること、集団の空間的流動性が生じること等によって、集落の血縁率は比較的高い状態で維持されることが可能となる。

本研究で対象とした期間は、1864～1869（元治元～明治2）年という限られたものであった。当時の三石場所のアイヌ社会は、政治的には幕府（1864～1868年）と明治政府（1868～1869年）といういわゆる国家の体制下に組み込まれていたことになる。つまり既に国家が形成されてその体制下に組み込まれていながらも、三石場所のアイヌ集落においては血縁率は高い状態が維持され、「血縁から地縁へ」という変化は生じていなかった。三石場所のアイヌ集落においては、定住性の程度に関わらず、より長期的な時間的スケールでみても「血縁から地縁へ」という変化は生じない可能性があると考えられる。

VI. おわりに

本研究の目的は、1864～1869（元治元～明治2）年の東蝦夷地三石場所のアイヌの集落を例に、定住性と集団の空間的流動性の程度が集落内居住者間の血縁親族関係とどのように関わっていたのかを検討することであった。分析の結果、以下のことが明らかとなった。

集落の存続期間が長くなり、家の同一集落内滞在期間が長くなっても、集落の血縁率は必ずしも低下しなかった。集落の血縁率は大きく変動しており、この変動は主に集団の空間的流動性に起因していた。それぞれの家は集落内に滞在したり、集落間で移動していたが、ほとんどの家が居住する集落の血縁率の変動を経験していた。集落の血縁率は、変動しながらも比較的に高い状態が維持されていた。集落の血縁率が50%未満の集落に少なくとも1回は居住した家は20.4%（10/49）にすぎない。そのような集落に常に居住したという家は1戸もなかった。79.6%（39/49）の家は常に血縁率が50%以上の集落

に居住していた。集団の空間的流動性には血縁共住機能があり、この機能によって集落の血縁率が比較的高く維持されていると考えられる。

ただし、集団の空間的流動性の程度と集落の血縁率の間にはとくに関係は無かった。「集落の血縁率が低いと分裂の流動性が高い」という傾向はなく、「結合の流動性が高いと血縁率が低い」という傾向もなかった。

以上のような短い時間的スケールのアイヌ集落に関する分析ではあるが、集落の血縁率は大きく変動しながらも比較的高い状態で維持されていたこと、および定住性の程度と集落の血縁率は関係しなかったことから次のような可能性があると考えられる。

アイヌ集落は、国家という体制下に組み込まれる以前から主に血縁親族によって構成され、集団の空間的流動性などによって集落の血縁率は変動しながらも比較的に高い状態が維持されてきていること。つまりアイヌ集落では、長期的な時間的スケールでみても「血縁から地縁へ」という変化は生じなかった可能性である。その一方で、集落の血縁率が50%未満の集落が少数例ではあるものの存在しており、そのような集落に少なくとも1回は居住した家は20.4% (10/49) であったことから、「血縁から地縁へ」という変化は短期的な時間的スケールにおいて部分的には生じていたと考えられる。

集団の空間的流動性が生じる現存の狩猟採集社会においては、定住性（あるいは移動性）の程度や空間的流動性の程度に関わらず、集落の血縁率は変動しながらも比較的高い状態が維持されていた可能性がある。農耕・牧畜が開始される以前の狩猟採集段階の集落においても集団の空間的流動性が生じていたと仮定すると、移動生活から定住生活への移行という長期的な時間的スケールでみても「血縁から地縁へ」という変化は生じなかった可能性があると考えられる。

残された課題は、アイヌ集落の分析に有効な史料

を新たに発掘することで、できるだけより長期的に本研究課題を検討し、狩猟採集社会における地縁と血縁の概念について比較考察することである。これが、親族的要素が強い部族社会から政治や経済という親族以外の要素を成立基盤とする国家の形成へという過程において、血縁から地縁へ進化する壮大な人類史としての「血縁から地縁へ」理論 (Maine, 1861; Morgan, 1877) を検討するうえでの基本的な作業になるものと考えられる。

付 記

本研究では平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））、課題番号：20520676、研究課題：狩猟採集社会の定住・移動性と集団の空間的流動性に関する歴史地理学的研究、研究代表者：遠藤匡俊）を用いた。なお、本稿の骨子は日本地理学会2007年春季学術大会において発表した。

(2011年5月31日 受理)

注

- 1) 当時の三石場所のアイヌは、春には内陸の河川沿いの本拠地から海岸へ出て、カスベ（鮎）、タラ（鱈）、ナマコ（海鼠）、イワシ（鰯）、コンブ（昆布）などを漁獲し、秋には内陸に戻り主にサケ（鮭）を漁獲した。秋から冬を経て春にかけてはシカ（鹿）、クマ（熊）、タカ（鷹）などを捕獲して本拠地で越冬するという生活を繰り返していた。このようなアイヌの季節的移動によって行われた海岸における漁業は和人（当時の日本人）との雇用関係によるものが多かったが、このような季節的移動の基点となる本拠地での生活においては、自律性を保持していたと考えられる（遠藤、2006）。
- 2) 「松浦武四郎文書」は松浦家から東京都品川区の国文学研究資料館史料館に委託された史料であったが、現在では三重県松阪市の松浦武四郎記念館に「松浦家文書」として保管されるようになっている。
- 3) ただし1860（安政7）年のものについては史料の一部が欠損しており、必ずしも全員の名前、居住集落などを復元することはできないために、血縁親

族関係の復元などにおいて補足的に用いた。

- 4) 出自 (descent) に基づく出自集団が主な構成員であるような地縁集団は血縁集団でもあるという事例が報告されている (Keesing, 1975)。出自とは集団の成員権に対する系譜的基準であり、出自集団は系譜的基準に基づく排他的・閉鎖的団体である (渡邊, 1987)。

- 5) A 集落の戸数が 4 戸 (A1, A2, A3, A4) であり、血縁率が 75.0% (3/4) である場合、4 戸のうち 1 戸だけがほかのどの家とも親子、兄弟姉妹関係ではなかったことになる。しかし親子、兄弟姉妹関係にある 3 戸間の関係は次の二つの場合がある。① A1 と A2, A2 と A3, A3 と A1 がそれぞれすべて互いに親子、兄弟姉妹関係である場合、② A1 と A2, A1 と A3 はそれぞれ親子、兄弟姉妹関係であるが、A2 と A3 は親子、兄弟姉妹関係ではない場合、の二つである。同様に、B 集落の戸数が 5 戸 (B1, B2, B3, B4, B5) であり、血縁率が 80.0% (4/5) である場合には、B1 と B2, B3 と B4 のそれぞれにおいてのみ親子、兄弟姉妹関係がある場合を含むことになる。ただし、A1, A2, B1 などとはそれぞれ家を示す。

- 6) 集団の空間的流動性を一過性のものではなく持続的なものとしてとらえるときには、集落がいくつかの家集団に分裂して各地に分散して終了という訳ではなく、各地に分散した家がほかの家とともに新たな集落を形成することになる。つまり集団の分裂のみではなく、結合による新たな集団の形成の双方をもって、はじめて集団の空間的流動性の形成過程が理解される (遠藤, 2006)。

- 7) 分裂の流動性 (S) を次のように定義する (遠藤, 2006)。

ある年に 1 集落を構成した n 戸の家が次の年には p 個の集落にそれぞれ x_1 戸, x_2 戸, \dots , x_p 戸ずつに分裂したとき、分裂の流動性 (S) の値は下記のように算出される。

$$S = (x_1^2 + x_2^2 + \dots + x_p^2) \div n^2$$

ただし、 $n = x_1 + x_2 + \dots + x_p$

n の値は各期 (I~V) の初年と末年ともに確認される家数であり、この間に絶家した家などは除く。分析の対象とはしなかった 9 戸のうち 8 戸は絶家と判断される。

- 8) 結合の流動性 (J) を次のように定義する (遠藤, 2006)。

ある年に 1 集落を構成した m 戸の家が前の年には q

個の集落にそれぞれ y_1 戸, y_2 戸, \dots , y_q 戸ずつ居住していたとき、結合の流動性 (J) の値は下記のように算出される。

$$J = (y_1^2 + y_2^2 + \dots + y_q^2) \div m^2$$

ただし、 $m = y_1 + y_2 + \dots + y_q$

m の値は各期 (I~V) の初年と末年ともに確認される家数であり、この間に新たに形成された家などは除く。分析の対象とはしなかった 35 戸のうち 32 戸は新たに形成された新戸と判断される。

- 9) 新たに形成された 2 集落のなかの 1 集落であるニノミカルイシ集落 (Z) は、1868 (慶応 4) 年に形成されたが 1869 (明治 2) 年には消滅していた。
- 10) 分散分析法によって、集落の存続期間と集落の血縁率の間には 5% 水準で有意な関連性はないことが確認された。分散比の値 ($V_0/V_w = 2.01$) は F-分布表の値 ($F_{36}^{0.05}(0.05) > 3.23$) よりも小さいので、有意水準 0.05 で「集落の存続期間と集落の血縁率の間には関連はない」とする仮説は棄却されない。
- 11) 分散分析法によって、集落の存続期間と集落の血縁率の間には 5% 水準で有意な関連性はないことが確認された。分散比の値 ($V_0/V_w = 2.21$) は F-分布表の値 ($F_{33}^{0.05}(0.05) > 2.45$) よりも小さいので、有意水準 0.05 で「集落の存続期間と集落の血縁率の間には関連はない」とする仮説は棄却されない。
- 12) 分散分析法によって、集落の存続期間と集落の血縁率の間には 5% 水準で有意な関連性はないことが確認された。分散比の値 ($V_0/V_w = 2.24$) は F-分布表の値 ($F_{30}^{0.05}(0.05) > 2.69$) よりも小さいので、有意水準 0.05 で「集落の存続期間と集落の血縁率の間には関連はない」とする仮説は棄却されない。
- 13) 集落の存続期間の平均を 4.6 年とする場合、「集落の存続期間の別と血縁率の違いには関連が無い」という仮説を立ててそれを検定する。 $\chi_0^2 = 0.117$ となり、自由度 1 の χ^2 -分布の 5% 点は $\chi_1^2(0.05) = 3.841$ であるので、この仮説は 5% 水準で有意である。つまり集落の存続期間の別と血縁率の違いには関連が無さそうである。同様に、存続期間の平均を 8.6 年とする場合、 $\chi_0^2 = 0.029$ となり、自由度 1 の χ^2 -分布の 5% 点は $\chi_1^2(0.05) = 3.841$ であるので、この仮説は 5% 水準で有意である。つまり集落の存続期間の別と血縁率の違いには関連が無さそうである。
- 14) 分散比の値 ($V_0/V_w = 2.75$) は F-分布表の値 ($F_{45}^{0.05} > 2.76$) よりも小さいので、有意水準 0.05 で「同一集落内滞在期間と集落の血縁率の間には関連はな

い」とする仮説は棄却されない。つまり同一集落内滞在期間と集落の血縁率の間には関連がなさそうである。

- 15) 分散比の値 ($V_u/V_w=3.77$) は F -分布表の値 ($F_{47}^{-1}>4.08$) よりも小さいので、有意水準 0.05 で「同一集落内滞在期間と集落の血縁率の間には関連はない」とする仮説は棄却されない。つまり同一集落内滞在期間と集落の血縁率の間には関連がなさそうである。
- 16) 分裂の流動性と血縁率の分析対象はのべ 30 集落であり、1864 (元治元) 年、1865 (慶応元) 年、1868 (慶応 4) 年のミツイシ集落 (N) の戸数はいずれも 1 戸であり、血縁率は 100% とした。
- 17) 集落の存続期間が 2 年間のヌフシュツ集落 (C) の場合には、集落の血縁率は 1868 年に 28.6%、1869 年に 40.0% と最も低かった。ヌフシュツ集落には 1856 年には 11 戸の家が居住していたが、それ以後は無人となった。1868 年にはルベシベ集落 (P) から分裂してきた 7 戸の家がヌフシュツ集落に居住した。この時点での結合の流動性 (J) は 1.0 である。この 7 戸は 1869 年までの間に分裂して 4 戸のみがそのままヌフシュツ集落に居住したが、このときの分裂の流動性 (S) は 0.43 である。1869 年には戸数 5 戸となったが、他集落から移動してきた家は確認できず、結合の流動性 (J) は 1.0 である。このように 1868 年にヌフシュツ集落に移動してきた 7 戸の家およびその 7 戸のなかで 1869 年にもヌフシュツ集落に居住した 4 戸の家は、史料上の制約から相互の血縁親族関係を確認することはできないが、お互いに血縁親族関係にあった可能性が残されている。
- 18) 「集落の血縁率と分裂の流動性の間には相関が無い」という仮説を立ててそれを検定する。統計量 t の実現値は $t_0=1.508$ であり、 t -分布表からは $t_{28}(0.05)=2.048$ が得られる。したがってこの仮説は有意水準 5% で採択される。つまり集落の血縁率と分裂の流動性の間には相関が無いといえる。
- 19) 集落の血縁率と分裂の流動性の値の平均値を用いて検定する。集落の血縁率の平均が 71.5% であり、分裂の流動性の値 (S) の平均が 0.86 である。そこで、「平均値よりも高いか、低いかにによる集落の血縁率と分裂の流動性それぞれ 2 区分の間には関連が無い」という仮説を立ててそれを検定する。 $\chi_0^2=3.087$ となり、自由度 1 の χ^2 -分布の 5% 点は $\chi_1^2(0.05)=3.841$ であるので、この仮説は 5% 水準で有意である。つまり集落の血縁率の別と分裂の流動性の連

いには関連が無さそうである。

- 20) 1864~1869 年の期間中に消滅したのは 3 集落である。集落の消滅時における 3 集落の分裂の流動性の平均は $S=1.0$ 、血縁率の平均は 66.7% であり、血縁率がやや低いにも関わらず分裂はしなかった。
- 21) 対象としたのべ 39 集落の血縁率の平均値を求めるときに、1 戸の家からなる集落の血縁率を 100% とし、各集落ごとの血縁率を算出し、その平均値を計算すると 73.6% になる。1864 (元治元) 年、1865 (慶応元) 年、1868 (慶応 4) 年、1869 (明治 2) 年のミツイシ集落 (N) および 1869 (明治 2) 年のルベシベ集落 (P) の戸数はいずれも 1 戸であり、血縁率は 100% とした。ただし、遠藤 (2006) のように 1 戸の家からなる集落を除いたうえで、各集落単位ではなく、対象とした集落全体を一括して 242 戸のうち 174 戸が血縁親族関係にあったとして集落の血縁率を算出すると 71.9% (174/242) であったが、その後に 3 集落の血縁率に修正を施した。
- 22) 「集落の血縁率と結合の流動性の間には相関が無い」という仮説を立ててそれを検定する。統計量 t の実現値 (絶対値) は $t_0=0.087$ であり、 t -分布表からは $t_{28}(0.05)=2.048$ が得られる。したがって仮説は有意水準 5% で採択される。つまり集落の血縁率と結合の流動性の間には相関が無いといえる。
- 23) 集落の血縁率と結合の流動性の値の平均値を用いて検定する。集落の血縁率の平均が 73.6% であり、結合の流動性の値 (J) の平均が 0.83 である。そこで、「平均値よりも高いか、低いかにによる集落の血縁率と結合の流動性それぞれ 2 区分の間には関連が無い」という仮説を立ててそれを検定する。 $\chi_0^2=2.5$ となり、自由度 1 の χ^2 -分布の 5% 点は $\chi_1^2(0.05)=3.841$ であるので、この仮説は 5% 水準で有意である。つまり集落の血縁率の別と結合の流動性の違いには関連が無さそうである。
- 24) 1864~1869 年の期間中に新たに形成された 5 集落の結合の流動性の平均は $J=0.77$ 、血縁率の平均は 72.4% であり、「新たに形成された集落では分裂の流動性がやや高い」傾向はあったものの、集落の血縁率は全集落の血縁率の平均 (74.3%) や結合の流動性が高い集落 ($J<0.83$) の血縁率の平均 (73.4%) と近い値である。

文 献

アイヌ文化保存対策協議会編 (1969): アイヌ民族

- 誌. 第一法規.
- 足利健亮 (1968): 東蝦夷地における和人と蝦夷の居住地移動. 人文地理, 20, 33-65.
- 有賀喜左衛門 (1937): 農村社会の研究-名子の賦役-. 河出書房.
- 有賀喜左衛門 (1962): 同族団とその変化-はしがき-. 社会学評論, 12-2, 2-7.
- 煎本 孝 (1987): 沙流川流域アイヌに関する歴史的資料の文化人類学的分析: C. 1300~1867 年. 北方文化研究, 18, 1-218.
- 泉 靖一 (1952): 沙流アイヌの地縁集団における IWOR. 民族学研究, 16, 213-229.
- 遠藤匡俊 (1985): アイヌの移動と居住集団-江戸末期の東蝦夷地を例に-. 地理学評論, 58A, 771-788.
- 遠藤匡俊 (1987a): 江戸末期の三石アイヌにおける流動的集団の形成メカニズム. 地理学評論, 60A, 287-300.
- 遠藤匡俊 (1987b): アイヌの移動形態を復元する方法について-地図と地名を用いて-. 地図, 25-4, 18-24.
- 遠藤匡俊 (1997): アイヌと狩猟採集社会-集団の流動性に関する地理学的研究-. 大明堂.
- 遠藤匡俊 (2006): 集団の空間的流動性からみたアイヌ集落の持続的な血縁関係-1856~1869 (安政3~明治2) 年の東蝦夷地三石場所を例に-. 地理学評論, 79, 547-565.
- 遠藤匡俊 (2009): アイヌの定住期間からみた集団の空間的流動性-1856~1869 年の東蝦夷地三石場所を例に-. 季刊地理学, 61-1, 19-37.
- 及川 宏 (1967): 同族組織と村落生活. 未来社.
- 小川正恭 (1999): けつえん 血縁. 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編: 日本民俗大辞典 上巻. 吉川弘文館, 570-571.
- 小川正恭 (2000): ちえん 地縁. 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編: 日本民俗大辞典 下巻. 吉川弘文館, 78-79.
- 喜多野清一 (1976): 家と同族の基礎理論. 未来社.
- 小林和夫 (1975): 安政3年の蝦夷地におけるコタンの分布. 北方文化研究, 9, 93-127.
- サイモン・ロバーツ著, 千葉正士監訳 (1982): 秩序と紛争-人類学的考察-. 西田書店. Roberts, S. (1979): *Order and dispute: An introduction to legal anthropology*. Penguin Books.
- 清水昭俊 (1987): ちえんしゅうだん 地縁集団. 石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編: 文化人類学事典. 弘文堂, 469-470.
- 須江ひろ子 (1964): Hare 族の社会構造-変貌する社会の一断面-. 民族学研究, 28, 181-196.
- 高倉新一郎 (1940): アイヌ部落の変遷. 社会学, 7, 130-163.
- 田中二郎 (1971): プッシュマン-生態人類学的研究-. 思索社.
- 鳥越皓之 (2000): どうぞく 同族. 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編: 日本民俗大辞典 下巻. 吉川弘文館, 184-186.
- 中野 卓 (1957): 家族と親族. 福武 直・日高六郎・高橋 徹編: 講座 社会学 第4巻 家族・村落・都市. 東京大学出版会, 44-70.
- 羽原又吉 (1937): アイヌの社会経済生活-主として漁獵生活よりの考察 (二). 歴史学研究, 7, 779-832.
- 原ひろ子 (1989): ヘヤー・インディアンとその世界. 平凡社.
- 渡辺 仁 (1965): アイヌ. 今西錦司・姫岡 勤・藤岡謙二郎・馬淵東一編: 民族地理 上巻. 朝倉書店, 213-225.
- 渡邊欣雄 (1987): しゅつじ・しゅつじしゅうだん 出自・出自集団. 石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編: 文化人類学事典. 弘文堂, 356-358.
- 張 政 (2006): 20 世紀前半における狩猟採集民オロチョンの社会集団の流動性とそのメカニズム. 季刊地理学, 57, 205-221.
- Damas, D. (1968): The diversity of Eskimo societies. Lee, R.B. and Devore, I. eds.: *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, 111-117.
- Decamps, P. (1925): La Répartition de la population chez les pêcheurs côtiers. *La géographié*, 44, 129-138. [Decamps, P. 著, 小牧実繁訳 (1933): 沿岸漁撈民間に於ける人口の分布. 地球, 19-4, 43-55.]
- Keessing, R.M. (1975): *Kin groups and social structure*. Holt, Rinehart and Winston. 小川正恭ほか訳 (1982): 親族集団と社会構造. 未来社.
- Lee, R.B. (1979): *The !Kung San: Men, women, and*

- work in a foraging society*. Cambridge University Press.
- Lee, R.B. and DeVore, I. eds. (1968) : *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company.
- Maine, H.J.S. (1861) : *Ancient Law*. London. 安西文夫訳 (1948) : 古代法. 史学社.
- Morgan, L.H. (1877) : *Ancient Society*. Holt, New York. 青山道雄訳 (1958) : 古代社会. 岩波書店. 荒畑寒村訳 (1953) : 古代社会. 古明地書店.
- Murdock, G.P. (1945) : *Social Structure*. Macmillan Company. 内藤莞爾訳 (1958) : 社会構造. 新泉社.
- Murdock, G.P. (1968) : The current status of the world's hunting and gathering peoples. Lee, R.B. and DeVore, I. eds. : *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, 13-20.
- Savishinsky, J.S. (1971) : Mobility as an aspect of stress in an arctic community. *American Anthropologist*, 73, 604-614.
- Service, E.R. (1966) : *Foundations of modern anthropology series : The hunters*. Prentice-Hall, Inc. 蒲生正男訳 (1972) : 狩猟民. 鹿島出版会.
- Tanaka, J. (1978) : A study of the comparative ecology of African gatherer-hunter with special reference to San (Bushman-speaking people) and Pygmies. *Senri Ethnological Studies*, 1, 189-212.
- Tanaka, J. (1980) : *The San, hunter-gatherers of the Kalahari*. University of Tokyo Press.
- Turnbull, C. (1961) : *The forest people*. Simon and Schuster.
- Turnbull, C. (1965) : The Mbuty Pygmies : An ethnographic survey. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, 50-3, 139-282.
- Turnbull, C. (1968) : The importance of flux in two hunting societies. Lee, R.B. and DeVore, I. eds. : *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, 132-137.
- Watanabe, H. (1972) : *The Ainu ecosystem, environment and group structure*. University of Tokyo Press.
- Woodburn, J. (1968) : Stability and flexibility in Hadza residential groupings. Lee, R.B. and DeVore, I. eds. : *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, 103-110.
- Woodburn, J. (1972) : Ecology, nomadic movement and the composition of the local group among hunters and gatherers : An east African example and its implications. Ucko, P., Tringham, R. and Dimbleby, G.W. eds. : *Man, settlement and urbanism*. Duckworth, 193-206.

Residential Stability Time and Blood Kin Relationships among Settlement Dwellers of the Ainu as Hunter-Gatherers in the Mitsuishi District of Hokkaido, Japan, 1864-1869

Masatoshi ENDO*

Membership within a residential group is not stable in hunter-gatherer societies, such as those of the San, Mbuti Pygmy, Hadza, Hare Indian, Inuit, Orochon, and Ainu. Do blood kin relationships among settlement dwellers fade gradually with time in hunter-gatherer societies? Do such gradual fadings of blood kin relations have any connections with their residential stability? These questions have not exactly been answered up to now in the hunter-gatherer studies. The purpose of this study was to measure the degree of residential stability and to investigate the connection between the residential stability time and the blood kin relationships among settlement dwellers. The study focuses on the Ainu as hunter-gatherers in the Mitsuishi district of Hokkaido, Japan, 1864-1869. The findings of the analysis can be summarized as follows :

So as to measure the degree of residential stability, the length of continuous durations of inhabited settlement in one location was used and is termed "settlement stability time". When we focused on 12 set-

tlements from 1864 to 1869, settlement stability time was within the range of 1 to 6 years (mean 4.6 years). The total number of settlements in 1864, 1865, 1868, and 1869 was 39. The blood ratio of settlements (the number of households that have parent-child and/or sibling relations with any other household within the same settlement/total number of households) was calculated for all 39 settlements. The average blood ratio of 39 settlements was 73.6%. That is, 73.6% of 248 households had some close kin relations with at least one household within each settlement. The degree of settlement stability time had no correlation with the degree of blood ratio of settlement. There was no tendency that the settlement stability time became longer, the blood ratio of settlement became lower.

So as to measure the degree of residential stability by household, the average length of continuous inhabited durations at the same settlement by household from 1864 to 1869 was used and is termed "household stability time". When we focused on 49 households that existed in all four years 1864, 1865, 1868, and 1869, the household stability times was 1.3, 2, 3, and 6 years (mean 3.4 years). The household stability time had no correlation with the average blood ratio of settlements that were inhabited by household members. There was no tendency that the household stability time became longer, the blood ratio of settlement became lower.

Fluid residential groupings were based on two processes: the splitting process of the resident members to various settlements and the joining process from various residential groups. The former is termed "splitting fluidity" and the latter "joining fluidity". The numerical value of the degree of splitting fluidity per settlement was within the range of 0 to 1 (mean 0.86). Just the same, the numerical value of the degree of joining fluidity per settlement was within the range of 0 to 1 (mean 0.83). The degree of settlement stability time had no correlation with the degree of splitting fluidity, with a correlation coefficient of $r=0.274$. And the degree of settlement stability time had no correlation with the degree of joining fluidity, with a correlation coefficient of $r=-0.014$.

When we focused on the 11 settlements that existed at least adjacent two years of 1864, 1865, 1868, and 1869, the average fluctuation rate of the blood ratio of settlement was $\pm 24.9\%$. These large fluctuations of blood ratios of settlements occurred mainly through splitting fluidity and joining fluidity. The blood ratios of 39 settlements were almost always over 50% in spite of their large fluctuations. It is recognized that fluid residential groupings had the function of ensuring sustainable blood kin relationships among settlement dwellers.

It can therefore be estimated that fluid residential groupings had close kins co-residing function in hunter-gatherer societies. And it can be postulated that sustainable blood kin relationships among settlement dwellers had been occurring with some fluctuations through fluid residential groupings for a long time in the hunter-gatherer societies.

Key words : Ainu, residential stability time, blood kin relationships, fluid residential groupings, Mitsuishi district

* Faculty of Education, Iwate University, Morioka 020-8550, Japan